

翻訳

ダシドンドギーン・バヤルサイハン 2016

フレグ・ウルス史研究の史料としての中世アルメニア聖人伝の利用可能性

D. バヤルサイハン, C. アトウッド (編) 『フレグ・ウルス研究, 新動向』 ウランバートル:
モンゴル国立大学出版会印刷所 157-174.

Дашдондогийн Баярсайхан 2016

“Дундад зууны армян агиографи нь Ил-хаант улсын түүхийн сурвалж болох нь”

in: Д. Баярсайхан & К. Атвүд (eds.) *Ил-хаадын судлал, шинэ хандлага*, Улаанбаатар:

МУИС Пресс Хэвлэлийн Газар: 157-174.

伊藤 崇展 ITO, Takahiro

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程

訳者による序文

本稿は、2016年にモンゴル国・ウランバートルで出版された『フレグ・ウルス研究, 新動向』という論文集の中の一章を日本語訳したものである。訳者は本稿の原文のみを web 上 (https://www.researchgate.net/publication/316374892_Dundad_zuuny_arman_agiografi_n_Il-haant_uls_yn_thijn_survalz_boloh_n, 2018年5月18日最終閲覧) からダウンロードしたが、論文集そのものを入手したわけではない。しかし、編纂者の1人であるバヤルサイハン氏によれば、当該論文集は2014年5月21~24日にかけてモンゴル国・ウランバートルで開催された国際会議の発表内容に基づくものである。そのプログラム (<http://news.num.edu.mn/?p=18220>, Хөтөлбөрийг эндээс үзнэ үү とあるリンク先から参照可, 2018年5月18日最終閲覧) に, Sources on Ilkhanid History というパネルにおける Armenian Hagiography for the Ilkhans というタイトルの発表があり, 原著はこれに基づいている。本論は, まずアルメニア史研究における聖人伝の史料としての性格や位置づけを述べ, その上で13世紀から14世紀にかけてのモンゴル時代のアルメニアにおける聖人伝を中心の分析対象とする。そしてその内容から, 当時のアルメニア地域での民族間関係, 宗教組織間の関係, フレグ・ウルスのアルメニア地域を巡る政策等に焦点を当てて, その歴史を描き出そうとするものである。

翻訳に際して, 本論中の固有名詞のカタカナ表記については基本的には原文のキリル文字表記の音価に従っているが, モンゴル語の歴史上の固有名詞についてはモンゴル語文語の音価に適宜改めた(例えば「ムフ・ハーン (Мөнх хаан)」は「モンケ・カアン (Möngke qa'an)」と改めた)。また, 本文末の文献一覧の記載方法については, 原文では所々に記載方法の不統一や不備が見られるため, 訳者が統一並びに補足を行った。

本論に先立って著者の略歴をここに紹介しておく。ダシドンドギーン・バヤルサイハン氏(Дашдондогийн Баярсайхан)は1958年ウランバートル生まれ。1981年にアルメニア共和国のエ

レバン国立大学文学部アルメニア文学専修を卒業。2003年にイギリスのオックスフォード大学で修士号を取得。2008年に同大学で「モンゴル・アルメニアの政治的関係 (1220-1335) (*Mongol-Armenian Political Relations (1220-1335)*)」という題目で博士論文を提出し、東洋学での博士号を取得。現在はモンゴル国のモンゴル国立大学科学部人文学科の教授である。主要著書に、*The Mongols and Armenians* (Leiden, 2011) がある。

聖人伝について

中世の歴史資料の中で「聖人伝」という種類は重要な位置を占める¹。なぜならば、宗教上の偉人の伝記であると同時に、地域の歴史や行政機能を聖人伝の作品から明らかにし得、人々の慣習、伝統を研究する可能性を提供するからである²。作品の性格については、聖人伝は文学の1つのジャンルであり、歴史、伝説、物語により近いものと見なされる。

聖人伝はその中で *vita*, すなわち伝記と、*passio*, すなわち受難〔訳者註：原語は *гэгээтний үйл ажиллагаа*, すなわち「聖人の活動」とされているが、これは後述する Wikipedia からの引用の際の誤読である。したがって、訳者は *passio* の通例の訳語である「受難」を採用する〕とに分けられ、この両者が共に含まれるのが一般的である³〔訳者註：註3を含めたこの一文は、Wikipedia（英語版）の *Hagiography* のページ (<https://en.wikipedia.org/wiki/Hagiography>, 2018年4月29日最終閲覧) からの引用である〕。このように、歴史家は聖人伝の研究によって貴重な情報を抽出するのである。実に、*martyrology* / *martyrdom*, すなわち迫害を受けて命を落とし、聖人の列に加わったその歴史は本研究のテーマとなる。

アルメニアの聖人伝は、主題については東方正教徒 (Eastern Orthodox Christian) の聖人伝と類似していることが研究の過程で明らかになっている。これはすなわち、ビザンツ及びシリアの聖人の伝記と記述及び構成の上で同様ということである。*Martyrology* (殉教録), すなわち迫害されて命を落とした聖人の歴史は、*Acta* (行伝, 心の強さを与える目的で罰を課して、それをどのように克服したかについての歴史), *Passiones* (受難, 聖人の伝記であり、命を落としたことを証

¹ 聖人伝 (*Hagiography*) とは信仰のために自らの命を犠牲にした宗教上の偉人の伝記である。聖人の列に彼らの名を加えるために、存命中に行っていた活動をこの種類の著作の内容に含めて調査する。キリスト教の聖人伝ではローマ・カトリック教会 (*Roman Catholic Church*), アングリカン・コミュニオン (*Anglican Communion*), 東方正教会 (*Eastern Orthodox Church*), 東方諸教会 (*Oriental Orthodox churches*), アッシリア東方教会 (*Church of the East*) などで、存命中に奇跡を起こした人々を公式に承認し、彼らを聖人の数に加えてその伝記を多くの人々に伝えるのである。

² 仏教, イスラーム, シク教等の他の宗教についても同様に、聖人伝的な作品が存在し、聖人, グル, また神通力を有した人々の伝記を語っている。

³ 4世紀以来、聖人の生涯を反映した3種類のカタログがある。年暦のカタログ, すなわちメナイオン (*menaion*) (ギリシア語で *μηναῖον*, メナイオンとは年間の「月の」という意味であり、「月」という天体の意味も含む) は、これを *sermon*, すなわち説教の時に読む。シナクサリオン (*synaxarion*) (ギリシア語で *συναξάριον*) は、すなわち年代順に並べた聖人の短編の伝記集である。パテリコン (ギリシア語で *πατερικόν*) は、すなわち編纂者が選んだ詳細な聖人の伝記のカタログである。

言した歴史), *Martyr's Legends* (殉教者伝, 後世に創作された伝説の入った歴史) という3つの部分に分けられる⁴ [訳者註: この一文は, Ferguson, E. (ed.) 1998. *Encyclopedia of Early Christianity Second Edition*, New York : 507-508 における Hagiography の項からの引用である]。アルメニアの史料において伝記と受難 [訳者註: 原文は *յիլ ажиллагааны өгүүлэмжүүд*, すなわち「活動の著述」としているが, これも *passio* の説明であり, 前述の通り「受難」の訳語を用いる] とは大きく発達した。しかし, 殉教録については極めて大きな発達を遂げた。これは当該地域の地理的位置, 諸民族間の関係, 宗教差別という問題の存在から生じたことである。今日の研究状況に則して述べるならば, 5~19世紀の間にアルメニアの聖人伝の20の伝記が書かれているが, それは200余りの聖人が迫害された歴史を有するのである。

アルメニアの歴史文献とアルメニアの聖人伝との両者の関係には古い伝統があり, 関心の中心となっているのはしかるべきことである。そこで, フレグ・ウルスの時代のアルメニアの聖人伝が, アルメニア人の宗教の歴史, モンゴル人の歴史とどのように関係しているのかという観点で考察するため, アルメニアの聖人伝研究について簡単に述べよう。

研究

アルメニアの聖人伝研究は19世紀, すなわち1810~1815年にムヒタル派の学者で聖職者のムクルティチ・アヴゲリアン (1762-1854) の, *Liakatar vark' ev vkayabanut' iwn srbots', vork' kan i Hintonats' uts' i yekeghets' woy Hayastaneayts'* (『アルメニア教会の古い暦から見つかった聖人たちの全ての生涯』) 12巻という著作が出たことに始まると言えよう⁵。研究者たちはその著作の最終巻の *Mnats' ordk' Varuts' srbots' artak' oy tonats' uts' in meroy, yishatakelots' i Yaysmawwurs kam i Ćarrantirs Hayots' orpes ev Yunats' ev Latinats' wots'* (『ギリシア, ラテンの人々の聖人伝抜粋集に記録された, 我々の古い暦に入らなかった聖人たちの伝記』) の意義を高く評価している⁶。

他の著者たちの選集については, *Sop' erk' Haykakank'* (『アルメニアの聖人伝』) 22巻が1853~1861年の間にヴェネツィアで出版され, 1874年に *Vark' ev vkayabanut' iwnk' srbots' hatantirk' aghealk' i charrantrats'* (「精選された説教における聖人の生涯と彼らの経験した受難」) 2巻の著作がヴェネツィアで出版された⁷。1155~1843年を範囲とした聖人たちの生涯についての記録を Y. マナンディヤン, H. アチャリヤンらが収集し [訳者註: 原文ではアチャリヤン, マナンディヤンの順で記載されているが, 当該文献の実際の書誌情報ではマナンディヤン, アチャリヤンの順で記載されている。したがって, 当箇所の翻訳並びに文献書誌の記載に際しては, 実際の書誌

⁴ 中世の西ヨーロッパにおいては聖人伝が歴史研究の重要な資料で, ヤコブス・デ・ウォラギネ (*Jacobs de Voragine* [訳者註: 原文では *Jacob* と表記]) の編纂した『黄金伝説』は, 奇跡を起こした聖人たちの歴史の集成であり, これらの聖人の故郷, すなわち聖遺物のありかに巡礼者が瞑想をしに行っていた。

⁵ この著作については *Jean-Baptiste Aucher* という著者名で長年知られ続けている。

⁶ [Nersessian 2010 : 458-461]

⁷ [Nersessian 2010 : 458-461]

情報に基づいて改めた], *Hayots' nor vkanerā* (『アルメニアの新しい聖人たち』) という著作を 1903 年に出版した⁸ [訳者註: 原文には註記がないが, 本段落は全文において [Nersessian 2010 : 458] に準拠している]。

中世アルメニアの聖人伝

アルメニアの聖人伝は書写や修辞の技法の優れた部類に入る。このこともあって, 教会の祈りの言葉の形が残っている。しかし, 我々の関心である中世において伝記は, 古典とは異なる部類である 1 つの構造を有するようになった。それは, 聖人たちについて彼らの弟子たちや一般の人々の話を通した, 日常的な表現を有した史話なのである。これが民間の口承文学, 物語の形を伴うようになったことをホヴァネス・サルカヴァグ (1129 年死去), トヴァ・メツォペツィ (1373/76-1447) らの聖人たちの伝記から窺うことができる。

11~12 世紀にアルメニアの史料編纂においてコロフォン (colophon), すなわち「奥付」という独立した部類が発達し始めた。これは聖人の生涯を当時の環境の中に見る伝記, 個人及びその人格をより中心にした伝記が現れる基盤となった。いくつかのコロフォンには当該聖人の生涯が直接反映されている事例がある。これらはメノロギウム (Menologium), すなわち月ごとに説教を行う時に読まれていた。ムクルティチが著述した『ムヒタル・サスネツィの生涯』[訳者註: 原文では *Мхитар Санецийн амьдрал* (『ムヒタル・サネツィの生涯』) と表記], マテオス・ジュガエツィが編纂した『グリゴル・タテヴァツィの生涯』などの伝記は, 聖人の列に入り, 14~15 世紀のアルメニア教会の総主教であった 2 人の生涯の歴史である。後の 16 世紀にはこの類の伝記が殉教録 (passio), すなわち活動, 思想に忠実であって, 命を落とした聖人の伝記として読まれるようになった⁹。

フレグ・ウルスの時代のアルメニア教会では *Yaysmawurk'*, すなわち文字通りには「この日」という意味である, 説教があつて¹⁰, 教会会議にていくつかの聖人の伝記を読んでいたのである。アルメニアの暦書に従って, 特定の日にはいくつかの聖人の生涯を選び出していた。「この日」を定める議論が終わると, 毎年 8 月 11 日に読まれるようになった。*Yaysmawurk'*, すなわち聖人伝抜粹集 (Synaxary) には 4 つの拡張版がある。

13 世紀前半に始まった (およそ 1240 年頃), テル・イスラエル版

キラコス・ガンザケツィ版 (13 世紀後半, 初版は 1252 年, 第 2 版は 1269 年に出版)

グリゴル・アナヴァルゼツィ版 (14 世紀初頭)

グリゴル・フラテツィ版 (15 世紀)

⁸ [Manandyan & Acharryan 1903]

⁹ [Cowe 2011 : 299-322]

¹⁰ *Yaysmawurk'* はローマ・カトリック教会の聖人伝抜粹集 (Synaxary) と同じである。

これらの版は後世に修正を経て出版されており¹¹、この例がバヤンの *Patrologia Orientalis* である¹²。グリゴル・フラテツィ版に基づいて 1706 年に編集して成立した版¹³が最も広く普及しており、今日のアルメニアのマテナダラン公文書館の写本の所蔵品の中にある。1970 年代にアルメニアの聖人伝の作品、特にアチャリヤン、マナンディヤンらの収集品から、テル・ダヴティヤンがロシア語に翻訳し、5～19 世紀の聖人伝抜粋集 (Synaxary) 、伝記、迫害の歴史等から部分的に、それぞれ別の時代に、それぞれの地域で出版された¹⁴。

フレグ・ウルス時代のアルメニアの聖人伝

モンゴル時代のアルメニアの聖人伝の *Martyrdom* (殉教録) は歴史文献の 1 つの構成要素であり、興味深い史話が豊富に含まれる。ヘレティの教会の最高位であったステパノスが死去した歴史を、グリゴル・アクネルツィが『射手の民族の歴史』という史料に書き遺している。簡潔に引用すると、

...この後、アルメニア暦 706 (1257) 年に大カアンのおわします東方より 7 人の王子がそれぞれ 1 万人の騎馬兵隊と共に来た。それらのうち 1 つの万人隊は 30 の千人隊から成っていた。この者たちの名前を述べると、最初の者、すなわち最も年上の者がフレグ (Hulawu) であり、彼はモンケ・カアンの弟である。2 人目は恥知らずにも自らを大いなる主人の弟と自画自賛していたクル、3 番目はバラケ、4 番目はトゥタル、5 番目はテグデル (Tegudar) 、6 番目はガタガン (Gatayan) 、7 番目はボラガン (Bawarayan) 、これらの者たちである。お互いに不和で、これらの首領は恐れ知らずにも、虐殺を行うような人々であった...

という。クルの騎馬軍の指揮官の 1 人がヘレティの教会にやって来た。その教会の首長はステパノスという長寿で敬愛を受けた、あらゆる面で善行の主の功德を有した 1 人の司祭であった。タタール人の指揮官が来ていることに直面するや否や、彼は瓶 1 本分のワインを取ってその指揮官をもてなし、タタール人の慣習に基づいてトゥズグ (作物の貢納) を差し出した。その後その指揮官を彼に従っていた軍人たちと共に教会に招いて座らせ、羊を屠殺し、ワインを開けて振る舞い、その指揮官ら皆が馬に騎乗することができなくなるまで飲み食いさせたのである。その晩にひどく酔ったタタール人の軍人たちは教会の近くにあった兵舎に向かって帰った。

¹¹ [Petrossian 2004 : 8]

¹² [Bayan 1910 ; 1911 ; 1927 ; 1922 ; 1924 ; 1926 ; 1930]. cfr. [Mécérian 1953 ; Zanetti 1987]

¹³ *Čarr srbots' vkayits'n chshmartin Astutzoy, azgats' ev azants', hanurts' k'ristoneits' ...,* Tp. Grigor dpri (Marsawanets'woy), Constantinople 1706.

¹⁴ [Тер-Давтян 1973 ; 1994 ; 1996 ; 1998]。アルメニアの「聖人伝抜粋集 (Synaxarium) 」には、ギリシア、ラテンの聖人たちの伝記もある [Nersessian 2010]。

タタール人は兵舎に着くや否や、皆一晩中深い眠りにつかずにはいられなかった。しかし朝に目覚めた時に、その指揮官がひどく気分が悪くなっていたことに皆が気付いた。気分の悪い理由を尋ねると、彼は「教会の首長が昨日私に毒を盛ったのだ」と言った。しかし、教会の首長には何の罪もなかったのであった。その指揮官のむかつきの理由は、彼は満腹であることがわからずに、目の前にあった全てのものを飲み食いしたことにあつた。タタール人はすぐさま1人の人間を派遣して老聖人ステパノスを捕えて縛り上げ、兵舎に至らせた。長期に渡って彼を取り調べたが、彼の供述した証言を信じることはなかった。地面に4本の杭を打ち込み、罪無き彼を、杭の内側の地面に穴を掘って広げて寝かせた。その後、火をたき老聖人ステパノスからその魂が離れ、天に登って行かれるまで焼いた。何の罪も無くでっち上げによって殺された聖人ステパノスの身体を囲んで光の柱が現れたのを、タタール人は目の当たりにした。純真にして聖なるステパノスの魂は聖人たちの魂と共に天に召された¹⁵。

この史話は中東でのモンゴル人の征服開始時期、すなわちフレグがこの地域に進出した歴史に関連している〔訳者註：フレグが中東に進出して現地に影響力を有するようになったのは1256年ごろである。この時期のモンゴルとアルメニアとの関係については [Bayarsaikhan 2011 : 121-142] を参照〕。ここからいくつかの事柄を見て取ることができる。それは、モンゴル人の地方での生活、人々と交わり始めた様子、ワインと作物の最も良質のものによって貢納を得ていたこと、教会の近くに軍団が宿営していたこと、飲み食いしたことによって身体を害していたこと、人の死体を焼いていたことなど、モンゴル人の慣習や気質の歴史を語っている。

もう1つの *martyrdom* (「殉教録」) の事例をキラコス・ガンザケツィが残している。これはアルメニアの武将であるジャラルが命を落とした史話である。キラコスの見方によれば、ジャラルは自らのキリストの信仰に忠実であったために、アルメニア暦710年(1261)に彼をペルシア人が捕えて大カアンから任命されたモンゴルの総督のアルグン・アカに引き渡したという¹⁶。実はジャラルは、地方のペルシアの平民がモンゴル人に納めていた税を横領し、自らは税を納めることから逃れていた。これを知ったアルグン・アカは彼を処罰することとした。ジャラルの娘のルズカンは、中東に最初に来たモンゴル人の1人、チョルマグン将軍¹⁷の子のボラ・ノヤンと結婚していた。自らの父の命を救おうとルズカンはフレグ・カンの皇后ドクズ・カトゥンに救済を求めた。アルグン・アカは説得を聞き入れず、武将ジャラルの四肢を4頭の乗用馬に縛り付け、その身体を切断して殺害した。アルメニアの人々の目には、ジャラルはキリストの忠実なる僕と映

¹⁵ [Григор Акнерци (tr. 2010) : 49-51]

¹⁶ [Kirakos Gandzakets'i (ed. 1961) : 390-392] 〔訳者註：当該史料については以下の仏訳も参照。Kirakos de Gantzac, XIII^e S., Oukhtanès d'Ourha, X^e S. 1870. *Deux Historiens Arméniens, Histoire d'Arménie ; Histoire en Trois Parties* (M. Brosset tr.). St. Pétersbourg.〕。比較として [Vardan Arewelc'i (tr. 1989) : 218], [Тер-Давтян 1998 : 48] を参照。ヴァルダン・アレヴェルツィの年代記については Vardan Arewelc'i (ed. 1862) *Hawak'umn Patmut'ean*. Venetik. も参照。アルグン・アカについては [Bayarsaikhan 2016 : 224-226] を参照。

¹⁷ チョルマグンについては [Баярсайхан 2016 : 43-44] を参照。

ったために、聖人の列に加えて彼の祖先の遺体と共にガンザサル修道院に埋葬した¹⁸。

この史話は研究上においてもまた大きな意義を有する。具体的には、地方のペルシア人、すなわちイスラームの人々と、キリスト教徒、すなわちアルメニアの武将との関係、租税並びに経済問題におけるモンゴル総督の厳格な政策、モンゴル人武将が娘婿となっても法律上は区別なく責任を負うことなど、帝国の政策の重要な問題がこの史話の至る所に現れている。

フレグ・ウルスの時代には、アルメニア教会総本山はラテン、すなわちカトリック教会の総本山と衝突しており、ラテン人に反する思想のために争い続けて命を落とした聖人たちの史話もある。この1つの代表例がゲオルグ・スケヴラツィである。この聖職者は13世紀後半に活動しており、聖書の教義の解釈に優れた写字生、また詩人であった。彼はカトリック教会と対立する思想を持った学者のムヒタル・スケヴラツィ及び歴史家のヴァルダン、すなわちヴァルダン・アレヴェルツィの弟子であった。1290年代にアルメニアの聖職者たちの中で、カトリック教会の思想と相反し、それゆえに罰を受けた聖人たちの史話の1つがこの事例である。ゲオルグ・スケヴラツィの弟子たちは自らの師の輝かしき功績に対し、その生涯を美辞麗句でもって讃える詩を成して書き残した。自らの命を犠牲にした師に哀悼の意を示した弟子たちの1人のモヴセス・エルズンカツィは、「哀悼の伝記」というジャンルの礎を築き、苦痛で胸が裂ける感情を表現している。

実に1290年のアルメニアの聖人伝は、ラテンの思想に反する態度において明らかな特徴がある。まさにこの時代にグリゴル・バルエツィが迫害されて死亡した歴史を、彼の弟子にして親族であるダヴィド・バルエツィが書き残した¹⁹。最後の部分でフレグ・ウルス君主アルグン・カン（在位1284-1291）、アルメニア王ヘトゥム2世（在位1289-1293）、キリキア・アルメニアのフロムクラの修道院の主教ステパノス（在位1289-1291）の時代に書いたと記されている²⁰。

その史話をここに描写する。1289～1290年〔訳者註：この時期は、フレグ・ウルスが西欧への使節派遣を行い、西欧、さらにはアルメニアと軍事同盟を結んでマムルーク朝に対抗しようとしていた時期にあたる。この時期のフレグ・ウルスを取り巻く外交関係については [Bayarsaikhan 2011: 179-184] を参照〕にグリゴルという名の高位聖職者がハルベルト（ハルプト）に散らばったアルメニアの信徒たちに説教を行いに来た。当時射手の民族²¹の総督で、モンゴルやペルシアの側が伝えていないハルバンダ・アカという名の武将が、ハルベルトを統治していた。マムルーク軍団がダマスкас、アレppoから従ってきた軍団と共に、ハルベルトを攻撃して陥落させようとしていた。マムルークたちはハルバンダの軍団に勝利し、彼の弟を捕えてエジプトに捕虜として連れ帰った。自身の弟を人質から解放するお金を集めるために、ハルベルトの裕福な人々を1つの場所に集めた。しかし、建物の屋根が崩落して多くの人々が圧死した。

¹⁸ [Kirakos Gandzakets'i (ed. 1961) : 390-392]

¹⁹ [Тер-Давтян 1973 : 265-274 ; 1998 : 49-55], [Manandyan & Acharyan 1903: 104-118]

²⁰ [Тер-Давтян 1973 : 274]

²¹ モンゴル人は多言語史料において様々な形で呼ばれており、主に「粗暴」、「野蛮」、「異教徒」と呼ばれる。しかし、アルメニアの歴史家たちはモンゴル人を「射手の民族」と、極めて的確な形で呼んでいるのである。

暴動が発生し、一部のムスリムが犬を殺してその身体をマシド（モスク）の門につるし、その頭部をマシドのミフラーブ²²に置いて、聖職者グリゴル並びにアルメニア人が信仰を冒涇したという噂を広めた。その報復として、ムスリムの軍人たちが断食の時にアルメニアの聖サルキスの教会に入って45の都市の人々並びに聖職者らを捕えた。この案件を裁くために地方から10人のカーディー（qādī）たち、すなわち裁判官を来させてグリゴル主教を尋問した。通訳は聖職者の返答を故意に誤訳し、裁判事務に厄介ごとを引き起こし始めた。

刑においてグリゴルの上半身を裸にし、仰向けに寝かせて300回、内臓が露わになるまで腹の上に鞭を打った。教会の宗教活動を手助けする役割を担っていたシメオン、キラコスらを尋問し、自らの信仰を捨ててイスラームに入信するよう駆り立てることが行われた。シメオン、キラコスらが拒否すると、暴行を与え続けて殺害した。次の番として、45の都市の人々を裁判官たちが呼んで尋問を行うこととした。しかし、都市でこのように処罰する動きが起こっていることを耳にしたモンゴル総督のタトゥカルが、軍団と共に来て人々を救い、「汝らは大カアン（チンギスハーン）の臣民を殺害している。私はカアンに何と言うであろう。この都市、人々に責任があるため、私はここに派遣されたのではなかったか」と言った²³。

人々は救われたが、盗賊の一団が聖職者グリゴルに石を投げて殺害し、その頭を切り取って都市の城壁に置いた。翌朝天から光が降り注いで聖職者の殺された場所を照らした。これを初めて見た指導者、すなわちムッラーは、「罪無き人を迫害して殺したのだ、信心深き人々に祈りを捧げよ」と呼びかけた。アルメニア人は3人の聖職者の身体をヤコブ教会の近隣にあるマール・バルサウマのシリア教会に埋葬した。この教会では治癒する奇跡を何度も見せていると著者が書いている。

この聖人伝の著作は13世紀のルーム・セルジューク朝の支配下にあつて、後にフレグ・ウルスの一部になったハルベルト村での多くの民族間関係を語った驚くべき史話である。基盤となる人口はテュルク、すなわちイスラームの人々、統治していたのはペルシア系で、彼らもまたイスラームの人々であった。1220年代以降、ホラズム・シャー朝から逃れたペルシア人がアナトリアに定住し始めたことが、ここに影響している。ここで名前の挙げられているハルバンダ総督の名前を、多くの研究者は長い間、フレグ・ウルス君主のオルジェイトゥと誤り、誤った結論を出し続けて来たのである。その理由は、フレグ・ウルス君主のオルジェイトゥが見下されて付けられた別名が、彼の幼少期にはハルバンダであったことによるもので、これは「驢馬のごとく愚かな奴隷」というペルシア語にちなんでいる。モンゴル側は吉兆に従い、オルジェイトゥの別名を後に改めてフダーバンダ、すなわち「神の僕」とした²⁴。このアルメニアの聖人伝の著作については、編纂者のテル・ダヴティヤン及びアチャリヤンらも誤って解説にフレグ・ウルス君主オルジェイ

²² イスラームのマシドのミフラーブというのは、メッカの方角を向いた壁にある特有の窪みである。

²³ [Тер-Давтян 1973 : 271-273]

²⁴ オルジェイトゥやその他のフレグ・ウルス君主については [Баярсайхан 2016] を参照。

トゥと記している。これゆえに、そこで語られている歴史が時代、地域、フレグ・ウルスの統治理念等に大きな混乱を引き起こすことは必然である。ここではハルバンダという名前のペルシア総督がいたことは明らかであるが、しかし著者がモンゴル人とペルシア人とのどちらであるかはわからないと述べていることから考えると、モンゴル人の行政のもとで職に就いていたペルシアの人々が多くいたことがわかる。

その村の地域ではアルメニア人の集団が教会に集まっていた。しかしながらハルベルトのヤコブ教会は 11 世紀以来自らのエписコプ (епископ), すなわち主教の位を有するようになり、より高い地位にあった。この近隣では村、都市の文化や生活の中心はマール・バルサウマのシリア教会であった²⁵。シリア教会及びアルメニア教会に相関関係があったという側面は、アルメニアの聖職者たちの身体をシリア教会に埋葬したことが何よりもよく示しているのである。

ハルベルトの社会生活には、大シリアの政治状況が反映している。マムルーク朝スルタンのカラーウンは 1289 年にフランク人のトリポリを、1291 年にはアッコンを征服した〔訳者註：1291 年当時のスルタンはハリール (在位 1290-1293)〕。この侵略の一部がハルベルト方面で行われた。フレグ・ウルス君主アルグンがこれを阻止するための軍団を派遣していたことについては、この聖人伝の歴史の記事において証拠を見出したことになる。

イスラームへの入信行為がモンゴル人の間で広がっていたこの時代に、フレグ・ウルスの君主たちがマムルークたちに対抗して西方の軍事力を利用する手段、同盟を結ぶ手段を模索し、4 人の使者を軍事遠征に帯同させた。これゆえにアルメニア人は、中近東にモンゴルが政権を固めたことによって、利益が生じていた。これをムスリムの人々が知って、セルジュークのマスジドを冒涇したという、事実と反する噂を考えるに至ったのも、この史話に示されている。このようにただ 1 つの martyrdom (「殉教録」) の著作からフレグ・ウルスの中央および地方の様々な思惑について結論を得ることができる。

もう 1 つの聖人伝の著作は、テオドシオポリスのグリゴルという名の高位聖職者が迫害された史話である²⁶。無名の歴史家が著述し、1567 年に再び書写された 1 つの史料にこの martyrdom (「殉教録」) が含まれている。テオドシオポリスというギリシア語で呼んだこの都市は、アルメニア人はカリン、テュルク人はエルズルムと呼んでいる。著者は著述している歴史的事件の目撃者、すなわち当時活動していた人物であろう²⁷。

テキストの構想は、射手の民族が世界を支配している時期、イスラームの信奉者 (イスマール派) が再び勢力を張っている時期、キリストの信奉者を抑圧する事件がアルメニア地域で増大した時期と定まっている。この記事は研究者たちにとって、フレグ・ウルス内部の姿勢並びにモンゴル人がイスラームに入信した状況にキリスト教世界がどのように対処することとしたのか

²⁵ [Cowe 2009 : 621-622]

²⁶ [Manandyan & Acharyan 1903: 121-128], [Тер-Давтян 1998: 56-60]. [Acharyan 1972 : 590, n. 425] も参照。

²⁷ [Тер-Давтян 1998 : 267]

を解明するために重要であり、ここに引用して提示することとする。

射手の民族がイスマーイール派に入信し、欲望にまみれた宗教であるがために自らの信仰を忘れて割礼の習慣を受け入れ、多くの罪深き行いをキリスト教の教会で引き起こし、仏教の寺院から仏弟子たちの追放を行った。彼らは多くの教会を略奪したが、主イエスは彼らに対して妨げとなって、自らの聖霊の力によって、異教徒が攻撃するのを囲んで防ぐのである。キリスト教徒に偏見があって、彼らはキリストの信仰、すなわち、父、子、聖霊に背かせるために厳しく拷問することとした。彼らは再び現れてキリスト教の人々に税を課し、1人頭7〜8ダヘカン（金貨）を毎年取り立てた。鑄貨を納めなければ、自らの信仰を棄てよ、そうでなければダヘカンあるいはハラージュを納めよと言うのであった。自らの信仰に強く踏み止まった勇気のある1人が、偽りの教義に影響されることなく毎年税を納めるようになった。我々のアルメニアのキリスト教徒たちは税に苦しみ、彼らに自らの財産を喜んで毎年納めていた。彼らは12歳の子供から税を取り立てていた。このことから、多くの人が自らの故郷を去って行った。この税を納めていた1人は主イエスに、より信心深かったのであった…

アルメニア暦770年(1321)になって、射手の民族で邪な考えを持ったダムルタシュ（テムルタシュ）、言い換えればイェルカタカル（Yerkat'ak'ar、「鉄の石」）という1人の男がフロムクラの修道院、キリキア・アルメニア人の土地に来た。この平和な土地は、オリーブの木から落とされた小枝のように狭小な場所に位置しており、嵐に襲われて信仰無き2つの民族の間に多くの苦難が降りかかっていた。信心無きイェルカタカル（Yerkat'ak'ar、テムルタシュ）は、とある理由でアルメニア王を妬み、彼の土地を略奪することを決心した。獅子の如く唸り、軍を集め、使者が急いで嘘の情報を伝えた。その敵意のある邪な人間の考えを察したアルメニア人は、彼の命令を無視して要塞、石塁を有して侵入のできない場所とするよう強固にした。イェルカタカル（Yerkat'ak'ar、テムルタシュ）はアルメニアの地を大いに闊歩し、騎馬兵を伴って侵入した。彼らはあらゆる物を略奪してエチミアジンの教会を都市の大部分と共に焼き払った。彼らは収穫した穀物を完全に焼き払って多くの人を殺害し、多くの人を捕虜とした。ここから彼らはカッパドキアのカエサレアに侵入し、セラクス十字架を破壊して粉々にした。この教会の聖職者は聖人の列に加わったために、彼の十字架を純金で鑄造したのであった。

前述したように、フレグ・ウルスの君主がイスラームに入信して、多くの民族の対立が宗教を基盤として緊迫するようになった1つの事例をここに示した。モンゴル人が宗教のあらゆる活動を慎重に取り扱うという基本方針は、ここでは別の様相を呈していたのである。なぜならば、キリスト教徒がハラージュという税を納めるようになっていたからである。ここに子供を巻き込み、人頭税と同様に毎年1回取り立てるようになった。この現象はフレグ・ウルス君主オルジェイト

ウ・カン期以降に広まったものである²⁸。

テムルタシュは1319年に初めてアナトリア,すなわちルームの土地で総督として統治した武将である。彼はキリスト教及びイスラームの歴史文献に,さらに言えばアルメニアの石碑においてさえ言及され,大アルメニアの地を1315年,1324年,1327年,1336年,1338年に度々攻撃し,自らキリスト教徒に反する行為を働いたことで,名を轟かせるようになった。上述した事件は,彼が大アルメニアからキリキア・アルメニアに向かって侵入した歴史と,そこから帰還して大アルメニアのエチミアジン²⁹の修道院を焼き払い,その後カッパドキアの地に至った事件である。テムルタシュが遠征したルートを示すと,中東を縦横無尽に進んだ道が現れ,そこを進んだのは数ヶ月どころか年単位の期間であったと計算されよう。この間に彼は多くの人々を捕虜としたのである。

この史話の最も核となる部分が,テオドシオポリス,すなわちカリンで起こった出来事である。地方の裁判官(qādī)は,テムルタシュの命令でカリンの聖職者グリゴルを,彼の父方の叔父のテル・パプと共に捕えた。異教徒であると言って聖職者グリゴルの目を潰し,彼の父方の叔父の性器を切除するなどして虐げた。盲目となった老人を尋問し,彼の答えに満足しなかった裁判官は,拷問して老人の裸体を針金で前後から鞭打った。その老聖職者の骨が浮き出るまで打ち付けた。瀕死の老人を路地に放り出す間に,慌てて駆け寄った多くの人々の教会を略奪し,教会の祭壇を破壊して高価な道具を福音書と共に奪い取った。

老聖職者を再び尋問して,イスラームに入信することを拒否した彼の膝の脛を引き裂いてその傷口に塩を塗った。彼がムスリム之家に軟禁されて20日以上になった時,彼を処刑する宣告が下された。高位聖職者を,厳にその首を切って殺害した。死から3日経った夜,空に大いに光が輝いたことによって,その身体を自らが治めていた聖ホヴァネス教会に埋葬することを,キリスト教徒たちは認められた。この出来事は1321年1月29日火曜日に起こった。

迫害の歴史は実に地方で起こっていた複雑な問題を解明し得る。上述したハラージュという厳しい税は,人々を然るべき移動へと駆り立て,大アルメニアの地からキリキア・アルメニア,クリミアへの移動の道を拓いた。民族的及び宗教的少数者の繊細な状況を利用して,不当な侵害に巻き込まれる機会が多かった。これは地方行政が頻繁に認めており,一部の権力者の戦略ですらあったであろう。

上述したテムルタシュは,フレグ・ウルスの晩年に権力を握ったチョパンの系統の人物であった。彼がキリキア・アルメニアに侵入していた1320年は,マムルーク朝スルタンのアル・ナースィル・ムハンマドの軍事行動がキリキア・アルメニアで行われた時期である。まさにこの時期にはキリキア・アルメニア国王のオシンが亡くなり,彼の子のレヴォン4世(1320-1341)は幼少であった。教皇ヨハネス22世(1316-1334)はマムルーク朝スルタン並びにフレグ・ウルス君主の

²⁸ [Cowe 2009 : 974-976]

²⁹ エチミアジンは4世紀に啓蒙者聖グリゴルがアルメニア人をキリスト教徒とした,アルメニア教会の象徴である。

アブー・サイードらに書簡を送っていた。彼がジョチ・ウルスのウズベク・カンに対し、キリスト教徒たちに敬意を持って接したことに感謝した書簡がある³⁰。しかし、テムルタシュにとってキリキア・アルメニアに侵入したのは、マムルークの人々を支援した彼の方針の手始めであっただろう。なぜならば、彼は 1322 年に反乱を起こした 5 年後、エジプトに向かって逃れているからである。

テムルタシュの命令で働いているカーディー (qādī) , すなわち地方の裁判官らの役割は、アルメニアの聖人伝に様々な形で現れている。彼らは法律を遵守させることを要求する役割を有し、並びにキリスト教徒に反して精力的に働く社会階層の代表となっている。都市の総督が亡くなった人間の遺体を埋葬する認可を与える時、彼ら裁判官たちは遺体を壁から吊り下げるのに高額な料金を請求していた事例がある。アルメニアの聖職者たちを罰し、当該都市や地域で活動していたアルメニア教会の役割を否定して、彼らを信徒の多くの前で中傷する意図を持ったカーディー (qādī) らが活動していた。

要約すると、200 以上の聖人の martyrdom (「殉教録」), すなわち迫害の歴史から一部の事例を述べると、このようになるということである。13~14 世紀のアルメニアの聖人たちの歴史と関連するこれらの歴史は、フレグ・ウルス君主のアルグン、オルジェイトゥ、アブー・サイードらの時代に係るものであり、地方史と結び付いている。さらに詳細に検討すると、アナトリア地方の宗教活動並びに行政行為を解明する根拠となり得る。述べた事例は、それぞれ時期が明確であり、アルメニアの歴史文献に反映された明確な出来事を映し出した記事なのである。迫害の歴史においては、vita (伝記), passio (受難) といった種類が形成され、アルメニアの聖人伝の発達のみならず、アルメニア教会の歴史、聖職者の伝記、フレグ・ウルスの社会や政治の有り方、民族間関係の歴史において、極めて重要な史料となり得るのである。

[追記] 本稿の作成に当たって、原著者であるバイルサイハン氏に翻訳を快諾いただき、翻訳に際しての不明な点についても逐一御教示を賜った。また、松田孝一氏にはバイルサイハン氏に対して訳者を紹介していただき、それによって本稿作成に関するやりとりを円滑に行うことができた。両氏のご厚意に対し、謹んで感謝の意を表する。

文献

一次史料

- ・ Bayan, G. 1910, 1911, 1927, 1922, 1924, 1926, 1930. “Le synaxaire arménien de Ter Israel” *Patrologia Orientalis* 5 : 347-879 ; 6 : 181-355 ; 15 : 293-438 ; 16 : 1-185 ; 18 : 1-208 ; 19 : 1-150 ; 21 : 1-879.
- ・ Kirakos Gandzakets'i 1961. *Patmut'yun Hayots'* (Melik'- Ohanjanyan, K. A. ed.). Yerevan: Haykakan SSRR. GA. hrat.

³⁰ [Arnold 1896 : 200-201]

- Manandyan, H. & H. Acharyan 1903. *Hayots' nor vkanerā (1155-1843)*. Vagharsapat: Mayr At'orr S. Ejmiatzni..
- Synaxarion (Yaismawurk') (*Āarr srbot's' vkayits'n chshmartin Astutzoy, azgats' ev azants', hanurts' k'ristoneits'...*, Tr. Grigor dpri (Marsawanets'woy), Constantinople 1706.)
- Гэгээнтний амьдрал. намтрын эмхэтгэл (聖人の生涯, 伝記の集成)
- Тер-Давтян, К. С. (ed.). 1973. *Памятники армянской агиографии*, Ереван: АН Армянской ССР

翻訳史料

- Vardan A. (1989) "The Historical Compilation of Vardan Arewelc'i" (R. W. Thomson tr.), *Dumbarton Oaks Papers*, 43: 125-226, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks.
- Григор А. (2010) *Нум сумтан ард түмний түүх* (Д. Баярсайхан et al., tr.), Улаанбаатар: Бэмби Сан.
- Тер-Давтян, К. С. (ed.) (1994) *Армянские жития и мученичества V-XVII в.в.*. Ереван: Наири.
- Тер-Давтян, К. С. (ed.) (1996) *Армянские жития V-XV в.в.*, Ереван: Наири.
- Тер-Давтян, К. С. (ed.) (1998) *Новые армянские мученики (1155-1843)*, Ереван: Наири.

研究

- Acharyan, H. (1972), *Hayots' Andznanneri Barraran. Peyrut'*: Sevan hrat..
- Adontz, N. (1924), "Notes sur les synaxaires arméniens", *Revue de l'Orient chrétien*, 24 : 211-218, Paris: Bureau des oeuvres d'Orient.
- Adontz, N. (1928), "Les fêtes et les saints de l'Église arménienne", *Revue de l'Orient chrétien* 26 : 74-104, Paris: Bureau des oeuvres d'Orient.
- Adontz, N. (1932), "Les fêtes et les saints de l'Église arménienne", *Revue de l'Orient chrétien* 27/28: 225-278, Paris: Bureau des oeuvres d'Orient.
- Arnold, T. W. (1896), *The preaching of Islam : A History of the Propagation of the Muslim Faith*, Westminster: Archibald Constable.
- Avdalbegyan, M. (1982), *Yaismawurk zhoghovatzunerā ev nrants' patmagrakan arzhek'ā*, Yerevan: Haykakan Gitut'yunneri Akademia.
- Bayarsaikhan, D. (2011), *The Mongols and Armenians*, Leiden: Brill.
- Bayarsaikhan, D. (2016), "Darughachi in Armenia", in: De Nicola, B. and Melville, C. (eds.) *The Mongols' Middle East : Continuity and Transformation in Ilkhanid Iran*, 216-236, Leiden: Brill.
- Cowe, S. P. (2011), "Armenian Hagiography", in: Efthymiadis, S. (ed.) *The Ashgate Research Companion to Byzantine Hagiography Volume I*, 299-322, Farnham: Ashgate Publishing.
- Der Nersessian, S. (1950), "La fête de l'Exaltation de la Croix", *Annuaire de l'Institut de Philologie et d'Histoire Orientales et Slaves* 10: 193-198, Bruxelles: l'Institute.
- Der Nersessian, S. (1950), "Le synaxaire arménien de Grégoire VII d'Anazarbe". *Analecta Bollandiana*

- 68 : 261-285, Bruxelles: la Société des Bollandistes [repr, in: Der Nersessian, S. (1973), *Études byzantines et arméniennes*, 417-435, Louvain: Imprimerie Orientaliste.].
- Harut'yunyan, S., K'alant'aryan A. (eds.) (2001), *Hayots' srberə ev srbavayrerə. Hodvatzneri zhoghovatzu*. Yerevan: Hayastan.
- Mécérian, J. (1953) "Introduction a l'étude des synaxaires arméniens", *Bulletin arménologique, Mélanges de l'Université de St. Joseph*, 30 : 99-188, Université Saint-Joseph: Imprimerie catholique.
- Nalbandyan, V. S. (1996), "Hagiografiakan zhanri usumnasirut'yan ardi vichaka", *Patma-banasirakan handes*, 143-144 (1-2): 111-116, Yerevan: Armenian National Academy of Sciences.
- Nersessian, V. N. (2010), "Eastern Christian Hagiographic Tradition. Oriental Orthodox : Armenian Hagiography", in: Parry, K. (ed.) *The Blackwell Companion to Eastern Christianity*, 458-461, Hoboken: Wiley-Blackwell.
- Peeters, P. (1911), "Pour l'histoire du synaxaire arménien", *Analecta Bollandiana*, 30 : 5-26, Bruxelles: la Société des Bollandistes.
- Petrossian, Y. (2004), "Latin Saints in the Synaxaries of the Armenian Church", in: Taft, R. F. (ed.), *The Formation of a Millennial Tradition : 1700 Years of Armenian Christian Witness (301-2001)*, Roma: Pontificio Istituto Orientale.
- Renoux, C. (1980), "Les fêtes et les saints de l'Église arménienne de N. Adontz", *Revue des Études Arméniennes*, 14 : 287-305, Paris: Association de la Revue des études arméniennes.
- Renoux, C. (1981), "Les fêtes et les saints de l'Église arménienne de N. Adontz", *Revue des Études Arméniennes*, 15 : 103-114, Paris: Association de la Revue des études arméniennes.
- Ter-Davt'yan, K'. S. (1980), *XI-XV dareri hay vark'agrowt'yunə*, Yerevan: HSSH GA hrat.
- Ter-Davt'yan, K'. S. (1982), "V kayabanut'yun zhanri zargats'umə hay matenagrut'yan mej", *Patma-banasirakan handes*, 97 (2) : 22-33, Yerevan: Armenian National Academy of Sciences.
- Thomas, D., Mallett, A. (eds.) (2012), *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History. Volume 4 (1200-1350)*, Leiden: Brill.
- Zanetti, U. (1987), "Apophtegmes et histoires édifiantes dans le synaxaire arménien", *Analecta Bollandiana*, 105 : 167-199, Bruxelles: la Société des Bollandistes.
- Баярсайхан, Д. (2016), *Хүлэгү хаанаас Абу Са'ид хүртэл: ил-хаадын тухай өгүүллүүд*, Улаанбаатар: МУИС Пресс Хэвлэлийн Газар.

(いとう たかひろ 大阪大学大学院文学研究科)